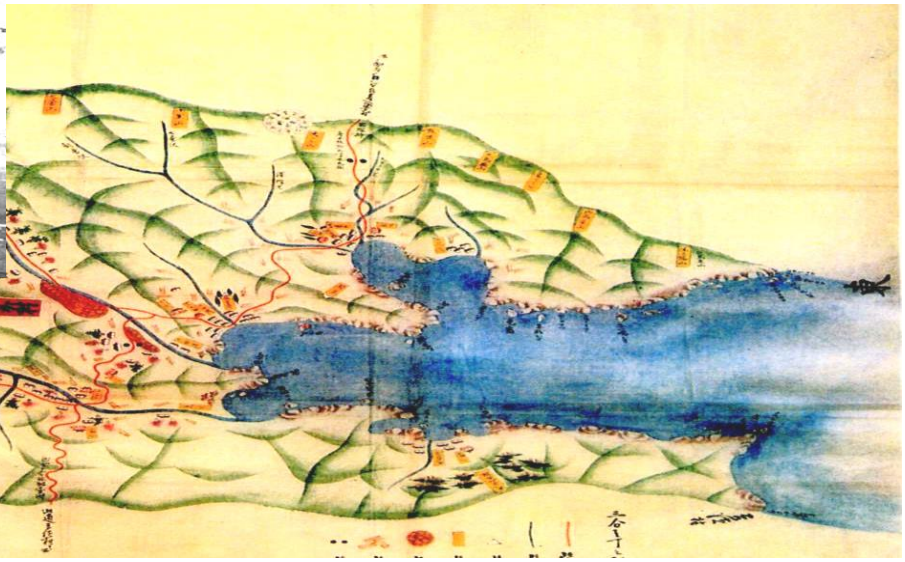
唐丹の民話・１７話「本郷地区」

御礼にさした



樫の枝が大木に

平成１８年１０月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目　次

―御礼にさした樫の枝が大木に―

唐丹民話の再話著作にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
１．唐丹本郷は村の要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
２．空海は弘法大師・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
３．さした枝が大木に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
＜参考＞　空海は（弘法大師）について・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
１．高野山金剛峰寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２．空海が真言宗を開くまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
３．真言宗の教えと空海のはたらき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
４．空海の伝説・弘法清水・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

唐丹民話の再話著作に当たって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成１７年６月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成２年発足）の機会紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしい」に想いをはせる一助になれば幸いとおもいます。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第１集から第６集に掲載の民話の数は９２編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「お礼にさした樫の枝が大木に」は釜石民話第４集「しゅくと云う屋号の家」を再話著作したもので、その原文は次のとおりです。

本郷にしゅくと云う屋号の家が有ります。
其の家に昔弘法大師が修行途上に立ち寄り一晩の宿を貰いとまったそうです。

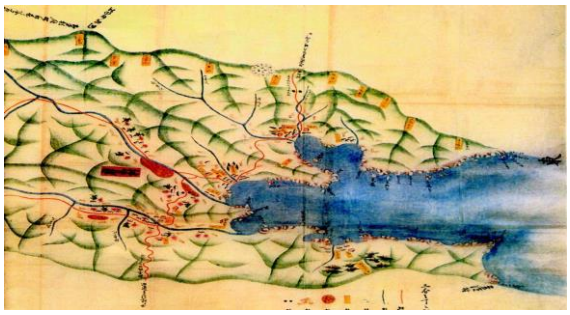
そして翌日、出立する時に持ってきた樫の木の枝を庭にさしたところが根がつき、手を回してもわれないような大木になったそうですが、道路を広げる時に切ってしまったそうです。

鈴木鉄雄氏奥さん

お礼にさした樫の枝が大木に

１．唐丹本郷は村の要

唐丹村は、吉浜の北にあり、北から西にかけて平田や甲子、上有住や日頃市の各村に山嶺をもって隣り合わせ、東は海に面しています。



（文政５年９月唐丹絵図）

唐丹湾は、南と北の二つに分けられ、南の湾には、小白濱、荒川濱、大石濱などがあり、北の湾を檜島ともいい、番所やまちなかもあって、ここを唐丹本郷あるいは本唐丹と称し、村の要所で在りました。

２．空海は弘法大師

いまから、１２００年位前の平安時代に修行の旅をしていた、空海（後の弘法大師）というお坊さんが、この本郷の「宿」という屋号の家に立ち寄り、泊めてもらったと言われています。

「宿」の人たちは、修行の身のお坊さんの疲れを癒すため手厚くもてなしたそうです。

このお坊さんは、旅発つとき、泊めてもらったお礼にと、持っていた樫の木の枝を庭にさすと主人に厚くお礼をいい、立ち去りました。

（修行僧・寺報より引用）

３．さした枝が大木に

（樫の木のイメージ）

翌年の春、この樫の木の枝は、根をはりすくすくと育って、大人の手でも抱えきれないほどの、見事な大きな木になりました。

しかし、その後の度重なる津波や火災などに遭い朽ち果てて、今は跡形も無いそうです。

おしまい

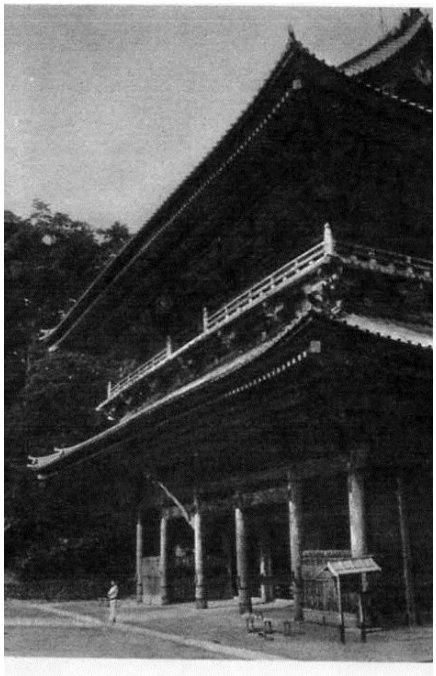
＜参考＞

空海（弘法大師）について

１．高野山金剛峰寺

高野山は、高さ９８５メートルの山で和歌山県の北部の紀伊山地にあり、この山にある金剛峰寺は、真言宗の総本山で、今から１５００年ほど前、空海によって建てられました。

空海は、青年時代、全国の山やまを歩きまわって苦行をしているとき、高野山こそ、自分がとじこもって修行をする場所だということを強く感じました。



（高野山の大門）

その後、空海は、桓武天皇の命で唐にわたり、唐の都長安で、真言密教を学び、８０６年（大同元年）に２年ぶりで帰国。そして真言宗を開き、その教えを広めました。

空海が４３歳になったときのことです。このころの空海は、嵯峨天皇に重く用いられていたので、前から心に思っていた高野山を修行の場としていただきたいと、願い出ました。天皇は直ちにこれをゆるし、８１９年（弘仁１０年）、寺は建てはじめられました。

空海がこの寺に閉じこもったのは５９歳になってからです。

ここへ移ってからは、みずから穀物をとらず座禅にあけくれました。「ながくこの山にとどまって弟子たちの修行をみまもる。」と誓いながら、６２歳の一生をおわりました。

この空海の精神は、“生身の大師今にいます”という信仰となり、１１００年を過ぎた今も、高野山に生き生きとのこっています。

空海は、６２歳で死んだのち、朝廷より“弘法大師”という呼び名をおくられました。

２．空海が真言宗を開くまで

空海は、７７４年（宝亀５年）に、讃岐の屏風浦（香川県善通寺市）にうまれました。

その後空海は、中国の仏教を学ぶことを命じられ、唐にわたりました。

３．真言宗の教えと空海のはたらき

真言宗は、山の中に寺をつくり、苦しい修行をしました。が、“密教”といって、お経を読み､神秘的な儀式をしていく特色が、強くみられました。

空海は､こうした教えを広めるいっぽう、農民たちのために、雨ごいのおいのりをするなど、民衆のためにいろいろなはたらきをしました｡特に､自分の生まれた故郷に、満濃池と呼ばれる面積１．５平方キロメートル」の人造湖をつくり、農民のためにつくしました。

（空海像）

４．空海の伝説･弘法清水

空海がこれほどえらい人だったものですから、日本中にかずかずの伝説などが伝わり、その一つに、“弘法清水”という話があります。

ある日、とおりがかりの旅僧が、山奥に住む男に一ぱいの水をくれといいました。すると男は、ふかい谷底からくんできた水をおしげもなく、お坊さんにあたえたので、お坊さんはそのこころざしに感心し、もっていた杖で地面をたたくと、そこからたちまち清水がわきだしてきて泉になりました。男は驚き、さっていくお坊さんの顔をチラッと見たら、それが弘法大師だったというはなしです。

（カッパ渕写真引用）

この弘法清水伝説は、全国いたるところにあり、山男がおばあさんだったり、娘だったりところによって少しずつ違っているだけです。みなさんの町にも弘法伝説がありませんか。

（参考の項）おわり

＜記載項目・内容例＞

◎釜石の民話・第４集：弘法大師の話

〇話　し　手：鈴木鉄雄氏奥さん／荒川

〇聴　き　手：加藤ムツさん／片岸

●再 話 著 者：中山志恵／小白浜地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：新沼　裕／本　郷地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●校正指導者：新沼　裕／（同上）

●再 話 完 成：平成１８年１０月